天下人の和歌・連歌

――信長・秀吉・家康――

鶴崎裕雄

一　寄合と想像の文芸、続歌と連歌

中世の人々、特に戦国期の武人たちは、続歌（つぎうた）と連歌[注①]という五・七調、または七・五調の短詩型文芸を楽しみ、熱中した。これらは和歌を基準とする文芸で、続歌は五・七・五・七・七の、いわゆる短歌で、参加者は与えられた歌題「立春」「蛍」「七夕契」「恨恋」「社頭祝」などに従って十首・三十首・百首など定数の歌を詠み、互いに歌を聞いて鑑賞し、詠者のイメージを共有した。詠み人は与えられた歌題から想像して歌を詠む「想像の文芸」である。そしてまた参加者は一つの場所、例えば邸宅の座敷や神社仏閣の拝殿や館の庭園などに寄り合って歌を詠み、互いに鑑賞してその雰囲気を楽しむ「寄合の文芸」である。

一方、連歌も、前の詠者が詠んだ前句から想像して句を付ける「想像の文芸」であり、複数の参加者（連衆）が一つに寄り合って五・七・五の長句と七・七の短句を交互に詠み続ける「寄合の文芸」である。詠み続けるのは、「百韻（ひゃくいん）」といって、原則的に百句を基準とする。時には戦勝や新築などの祝事や亡き人の追悼など、大掛かりな百韻の一〇倍の千句や、さらに百韻の一〇〇倍の万句の連歌が催された。

連歌といえば天正一〇年（一五八二）五月、京都の西、愛宕山威徳院で催された明智光秀の『愛宕百韻』が有名である。[注②] 光秀はこの百韻を愛宕社に奉納した後、京都本能寺に滞在中の織田信長を奇襲した。この『愛宕百韻』の冒頭の八句は次の通りである。

ときは今天（あま）が下しる五月かな　光秀
水上（みなかみ）まさる庭の夏山　行祐
花落つる池の流れを塞き止めて　紹巴
風に霞を吹き送るくれ　宥源
春も猶鐘のひびきや冴えぬらん　昌叱
かたしく袖は有明の騒　心前
うら枯れになりぬる草の枕して　兼如
聞きなれにたる野辺の松虫　行澄

連歌の最初の句は「発句」、二番目は「脇」、三番目は「第三」と呼

ばれ、以下四句目・五句目と続けられる。旧暦の五月は梅雨の時とて、発句の光秀は「今は梅雨が降る五月だ」と詠んだ。実はこの発句には「美濃の土岐氏が天下を支配する五月になった」という意味を込め、戦の神である愛宕社に奉納したとして、美濃の土岐氏の出身の光秀が、自分の手で天下統一を目論んだというのである。光秀が天下統一の願望を詠み込んだかどうか、その真偽はさておき、次の脇句は、五月の梅雨のため庭園の池の水が増え、庭の築山の木々も茂ったと景色をイメージした。

第三は、春に咲く花（桜）が散って池の流れを堰き止めたので池の水が増えたと説明する。四句目は、花を散らした風が春霞を吹き送っている。五句目は、吹き送られる風につれて鐘の響きが聞こえるがまだ春も寒いので冴え冴えとしていると詠む。

六句目は、夜には衣を敷いて寝るのであるが独り寝のため独り分の衣（片袖）しか敷けないので翌朝の霜はいっそう冴え冴えと感じられる。七句目は、葉先が枯れ始めた草で枕を作って寝る。いわゆる旅の草枕である。八句目は、野宿の旅を続けていると野原の松虫の音も聞き慣れるようになった。

このように前句のイメージを受け、次のシーンを想像して詠み続ける。連歌もまた続歌と同様「寄合の文芸」である。それも前句のイメージを基にして新しいイメージを詠み続けるので寄合性はもっと強いといえよう。

中世、鎌倉時代から室町時代にかけて、この続歌と連歌が盛んに流行した。この内、傾向としては続歌は公家の間で、連歌は武士の間で流行していた。室町時代の連歌師宗長の著書といわれる『連歌比況集』[注9]

一〇

に「城攻め・合戦」という項目があって、戦（いくさ）には、城に立て籠もる敵を攻める戦いと互いに合戦場に出陣して攻め合う戦いを較べた項目である。宗長は駿河の出身で、幼くして守護の今川義忠に仕え、合戦にも度々従ったという。以下は宗長が実際に経験した事柄であろう。

連歌と歌との難易を申さば、歌は題を取りて起き臥（ふ）して案じ、また抄物をも見合はせて詠む物なり。連歌は列座して、人の句に我付け、我が句に人付くる物なれば、物を見るにも及ばず。油断しては不可叶物なり。たとへば、歌は城攻めをせんがごとし。城の切岸へ付きて返り、壁尺の木などを結ひて、物の具脱ぎ置きて、折を待ちて攻むる物なり。連歌は打ち出でて合戦するがごとし。難易この中にあり。よくよく工夫すべし。

和歌と連歌の難しさをいうと、和歌は起きても寝てもあれこれ考え、参考書を見て考えるが、連歌は参加者の連衆が互いに付け合って進行する物なので、参考書などを見て、ゆっくりとしてはおれない。和歌は城攻めの時、城の崖淵に待機して、崖を登る道具など用意して鎧など脱ぎ、出陣の合図などを待って攻める。連歌は兵を打ち出して合戦するようなものである。つまり連歌は連衆の付け句で次々と変化するので、臨機応変に対応しなければならないという。いかにも出陣を経験した連歌師のコメントである。

同じ想像の文芸であり、寄合の文芸であっても、『連歌比況集』がいうように続歌と連歌にはこのような違いがある。しかし違いはあっても中世の人々は続歌と連歌に熱中した。

二　戦国期、天下人の和歌・連歌関係略年譜

本稿は執筆の契機となった平成三〇年二月の中京大学シンポジウムの演題通り「天下人の和歌・連歌――信長・秀吉・家康――」としているが、第三節では天下人の先人として三好長慶を論じている。信長の先駆には長慶がいて、幕府を無視し、将軍や管領をないがしろにした、まさに下剋上を代表する人物長慶である。しかも連歌の名手であり、時代を代表する文化人であった。次の関係年譜にも信長・秀吉・家康とともに長慶を取り挙げている。

現在の高等学校教科書には「戦国時代」という言葉はあまり使われていないが、ここでは一応、「戦国期」として応仁・文明の乱から元和偃武までを年表にまとめて眺め、本稿で取り上げる続歌と連歌を加えておきたい。

元和偃武とは元和元年（一六一五）大坂夏の陣以後、戦乱の時代が終わったこと。偃は伏せるの意。武器を伏せて用いないこと。

年譜中、関連記事の掲載を縦組みの（　頁）に示す。

応仁元年（一四六七）五月　応仁の乱勃発、以後一一年間の戦乱。
文明五年（一四七三）三月　山名宗全（持豊）没。五月　細川勝元没。一二月　足利義尚将軍就任。
文明九年一一月　足利義視を奉じて土岐成頼帰国、大内義政・畠山義統（よしむね）も帰国し、京都の応仁の乱は収拾。
延徳元年（一四八九）三月　足利義尚（義熙）鈎の陣で没。四月義視・義材帰洛。
延徳二年七月　義材将軍就任。
明応二年（一四九三）閏四月　明応の政変勃発。細川政元、将軍義材を追放、畠山政長敗死。足利義遐（よしとお）（義澄）将軍就任。
明応四年六月　宗祇ら『新撰菟玖波集』成立、准勅撰となる。
明応九年一〇月　後柏原天皇践祚。
文亀二年（一四〇二）七月　箱根湯本で宗祇没。
永正四年（一五〇七）六月　細川澄之ら政元を暗殺し、細川澄元を追放し、細川氏の内部抗争勃発。八月　細川高国ら澄之を討ち、澄元に家督。
永正五年六月　前将軍義尹（よしただ）（義材）・大内義興入京、義澄逃亡。七月　義尹将軍就任、高国・義興の両京兆体制樹立。
永正八年八月　管領高国・義興 対 澄元・細川政賢の船岡山の合戦勃発し、澄元方敗北。
大永七年（一五二七）二月　高国敗死。三月　堺に細川晴元政権樹立。
天文五年（一五三六）九月　晴元入洛。
天文一〇年（一五四一）二月　松平広忠、徳川家康懐胎の夢想を感得（一二頁）の伝承。一〇月　木沢長政により将軍足利義晴・管領細川晴元、京都退去。
天文一一年三月　長政敗死。義晴ら帰洛。
天文一八年七月　細川氏綱・三好長慶入洛。
天文一九年六月　長慶・寿慶・宗訊の三吟（八頁）。
天文二〇年（一五五一）六月　長慶・宗養『天文三好千句』興行

（五頁）。

天文二一年九月　長慶・宗養との両吟。同月　長慶・宗養・紹巴と三吟（寿慶追悼、八頁）

天文二二年八月　長慶、芥川城に入城。

弘治二年（一五五六）七月　長慶・松永久秀・宗養ら『瀧山千句』（六頁）興行。

弘治三年五月　長慶・冬康（安宅）・宗養の三吟（八頁）。一〇月　正親町天皇践祚。

永禄三年（一五六〇）五月　桶狭間で織田信長、今川義元を討つ。

永禄四年五月　長慶・宗養・紹巴ら『飯盛千句』（六頁）興行。

永禄七年一月　長慶・紹巴の両吟（宗養追悼、八頁）。七月　長慶没。

永禄八年五月　三好三人衆・松永久秀、将軍足利義輝暗殺、細川藤孝・明智光秀ら足利義昭を助け、越前朝倉氏を頼る（後、信長を頼る）。

永禄一一年（一五六八）九月　信長入洛し、足利義昭将軍就任。一一月　良政（明院）・藤孝・白（聖護院道澄）・紹巴・昌叱・心前・玄哉・光秀ほか（上洛早々、藤孝や光秀が当時の一流の連歌師紹巴や昌叱と連歌を詠むことに注目したい）。

元亀二年（一五七一）二月　藤孝、紹巴・昌叱たちと『大原野千句』（七頁）に出座。この千句は『連歌総目録』に諸本二五本が掲載されるほど後世に注目された千句である。

天正元年（一五七三）七月　義昭、信長に敗北し、室町幕府滅亡。

天正三年五月　長篠合戦、織田・徳川軍に武田軍敗北。

天正六年五月　羽柴（豊臣）秀吉、中国出陣の『羽柴千句』（八頁）を催す。

天正七年一月　藤孝、定家の色紙披露目「来ぬ人を……」の色紙を入手し、紹巴・昌叱・心前と四吟連歌（八頁）を催す。『連歌総目録』に諸本二八本掲載。

天正八年四月　本願寺顕如、信長に敗れ、大坂を退去。

天正一〇年（一五八二）四月　信長、武田勝頼を討つ。五月　光秀、『愛宕百韻』（一頁）を奉納。六月　本能寺の変。秀吉、光秀を討つ。

天正一一年四月　賤ヶ岳合戦で秀吉、柴田勝家を破る。

天正一二年三月～一一月　秀吉・家康の小牧長久手の合戦。

天正一三年三月　秀吉、紀州攻め。七月　秀吉、四国平定。

天正一四年一二月　秀吉、関白太政大臣、豊臣姓拝受。

天正一五年五月　九州攻め。島津氏敗北。

天正一八年七月　小田原攻め。東北地方を配下に収めて天下統一。

文禄元年（一五九二）一月　文禄の役、朝鮮出兵。

文禄三年三月　高野山で秀吉・応其・紹巴・家康・幽斎・前田利家・蒲生氏郷・伊達政宗ら大政所三回忌百韻連歌（一〇頁）。

慶長元年（一五九六）一一月　秀吉、住吉明神の歌を夢想（一〇頁）。一二月　その夢想歌を発句・脇に大坂城で秀吉・昌叱・織部ら夢想連歌（一一頁）。

慶長二年一月　慶長の役、再度朝鮮出兵。

慶長三年八月　秀吉没。

慶長四年二月　家康親族・家臣らによる夢想連歌（一三頁）。

慶長五年九月　関ヶ原の合戦。家康軍に石田三成軍敗北。
慶長七年二月　上杉景勝の家臣直江兼続ら出羽国米沢の北、亀岡文殊堂に『亀岡文殊堂奉納詩歌百首』奉納（一六頁）。
慶長八年二月　江戸幕府開闢、家康将軍就任。
慶長一一年（一六〇六）一〇月～慶長一二年一一月　加賀国金沢藩家臣ら加賀白山社に『白山万句』奉納（一六頁）。
慶長一九年一一月　大坂冬の陣。
元和元年（一六一五）五月　大坂夏の陣。

三　三好長慶の和歌・連歌

三好長慶[注4]は大永二年（一五二二）誕生。三好氏は阿波国の豪族で守護細川氏の被官であった。堺で父元長の戦死により家督を継ぎ、天文八年（一五三九）摂津の越水城（兵庫県西宮市）に入り、天文二二年八月に摂津の芥川城（大阪府高槻市）に入り、永禄三年（一五六〇）河内の飯盛山城に入った。長慶はこの飯盛山城から京都や畿内五カ国、阿波一円に睨みを据え、天下人の先駆を示したのであるが、永禄七年七月飯盛山城の屋敷で病死した。

長慶が連歌の名手であった逸話に「古沼の浅き方より野となりて」の付け句がある。『三好別記』[注5]ほか長慶に関わる軍記にはよく記される有名な逸話である。永禄五年三月、根来寺衆徒と畠山高政の連合軍と長慶軍が和泉の久米田（大阪府岸和田市）で合戦の最中、長慶の弟実休が戦死した。その時、飯盛山城の館では連歌が行われていて、「芦間に混じる薄一群」という句が詠まれた。[注6]連衆が付け句を付けあぐねていた時、実休戦死の注進状が長慶の許にもたらされた。長慶は動ずることなく注進状を一見して懐中に入れ、「古沼の浅き方より野となりて」と詠んだ。水辺に生える芦に混じって一群の薄が生えているのは、古い沼の浅い方からが陸地化して野となっている、水辺の芦に混じって陸地に生える薄があるのは沼が陸地化したからだと詠んだのである。同席の実弟の安宅冬康は最初の五文字を聞いて、「珍重々々」と叫んだという。弟は最初の五文字を聞いて、兄の句を理解したのである。連歌が終わった後、長慶は京都から招いていた連歌師の宗養や紹巴たちに実休の討ち死にを報せ、敵の攻め入るまでに早く帰洛するように帰し遣わしたとある。

このように長慶は都の連歌師を居城に招いては連歌を楽しんだ。長慶が京都から連歌師を招く話は英国ロンドンの大英博物館蔵『猿の草紙』[注7]に記されている。比叡山の猿の神主の娘が男の子を産んだ。神主は聟猿を招いて祝宴を張り、連歌会を催した。その折、神主は連歌の連衆に誰を呼ぼうかと、「当時の先達なれば宗養召下（めしくだ）さばやと思へども、河内の飯盛へ下向のよし聞及（ききおよぶ）間、打置（うちを）きぬ」とある。宗養は長慶に招かれて飯盛城に下向しているという。長慶の連歌好きが御伽草子に取り入れられているのである。

長慶は千句連歌を三つ残している。天文二〇年（一五五一）六月の『天文三好千句』[注8]と弘治二年（一五五六）七月の『瀧山千句』[注9]と永禄四年（一五六一）五月の『飯盛千句』[注10]である。この内、『瀧山千句』と『飯盛千句』のそれぞれの千句の発句を見ると興味深いことに気付く。

千句は百韻連歌が一〇巻によって成立する。つまり発句が一〇句あ

る。この内、『瀧山千句』は長慶の父元長の二五回忌を堺の顕本寺で千部経を上げて大々的に供養した後、大阪湾を渡って兵庫の津に着き、布引の瀧のある瀧山城で催した千句連歌であり、主催は長慶の家臣松永久秀である。現存する写本は各百韻の発句・脇・第三の三句を書きとどめた「三つ物」である。この内、各発句を見ると、

第一の百韻　難波津の言の葉おほふ霞哉　長慶
第二の百韻　すみよしといふ名にめてよ帰る雁　宗養
第三の百韻　花そちる山には春や水無瀬川　為清
第四の百韻　ぬきとめぬ玉江の波か飛蛍　辻三　玄哉
第五の百韻　湊川夕塩こえて夏もなし　芦屋神主　範与
第六の百韻　みしやいつ今朝初島の雲間哉　兵庫久遠寺　快玉
第七の百韻　氷しや須磨の月こそ夜の海　正秀
第八の百韻　鹿の音や生田の沖の山風　元理
第九の百韻　舎りせよ浦は蘆の屋初時雨　等恵
第十の百韻　布引のはたはり広し雪の瀧　松弾久代　宗養
追加　廿日あまり出るも山や夕月夜　尊世

この内、第一～第三の百韻の発句は春の句、第四～第五の百韻は夏の句、第六～第八の百韻は秋の句、第九から第十は冬の句、最後の追加はこの千句が行われた秋の句である。注目すべきは傍線〰で示したように摂津国の名所（歌に詠まれる地名＝歌枕）である。追加の「廿日」は「羽束山」である。各発句に摂津国の名所を詠み込んでいる。

ところで五年後の『飯盛千句』の各発句を見ると、

第一の百韻　汲わすれくみしる月や石清水　長慶（山城）
第二の百韻　木間もる月影幾重氷室山　宗養（〃）
第三の百韻　春日野のとふ火や螢夕月夜　為清（大和）
第四の百韻　茂る木に月やこもりくの初せ風　元理（〃）
第五の百韻　夏の夜の月や水尾行天河　玄哉（河内）
第六の百韻　月残るかた野や行ゑ郭公　直識（盛）（〃）
第七の百韻　在明や花も待らん（本ノマヽ）（朱）五月山　淳世（摂津）
第八の百韻　影涼し月や堀江の玉柏　紹巴（〃）
第九の百韻　月出て夏やしの田の森の露　快玉（和泉）
第十の百韻　こぬ秋や月にふけ井の奥津風　一舟（〃）
追加　夏の日やこかけさためぬ夕涼　仍景（後の昌琢）

全句ともに五月のこととて夏の月が詠まれていて、第一と第二の発句には山城国の名所（歌枕、作者名の次に国名を記した）、第三と第四には大和国、第五と第六には河内国、第七と第八には摂津国、第九と第十には和泉国の名所（歌枕）が詠み込まれている。

長慶は下剋上の波に乗って成長した。『瀧山千句』と『飯盛千句』の間には五年の歳月があり、居城も芥川城から飯盛山城に移転した。注目すべきは、『瀧山千句』の発句は千句が行われた摂津国内の地名である。しかし『飯盛千句』の発句は五畿内の地名である。古来、畿内は天皇の住む王城の地である。私はこの発句の相違に、長慶の天下に号令しようという意気込みを感じる。

四　織田信長の和歌・連歌

――細川藤孝・明智光秀・古田重然――

永禄一一年（一五六八）九月、織田信長は足利義昭を擁して上洛し

た。信長に従って上洛した武将たちは、戦のない時、暇にあかせて都の文化を吸収しようとした。漢学や漢文に興味のある者は五山の学僧を尋ね、連歌好きの武将は紹巴や昌叱ら都の連歌師に接触した。なにしろ戦がなければ武将たちは暇である。長年憧れていた都の文化を各自の興味に応じて吸収しようとした。もっとも室町幕府に仕えた細川藤孝や京都に馴染んでいた明智光秀たちは別格として、古田重然（左介、茶道の織部）などは紹巴や昌叱の周辺にいたようである。

信長からは和歌や連歌は感じられない。幸若舞は好んで舞ったというので、身体を動かす事が好きで、座って和歌を詠んだり、連歌の座に列なることは避けたのかも知れない。

天正三年（一五七五）五月、長篠合戦を前に信長と右筆夕庵・連歌師紹巴が詠んだ連歌の発句・脇・第三が伝わる。

松高く竹たぐひ無き五月かな　　信長
白うは見えぬ卯の花がさね　　夕庵
入る月も山方薄く消え果てて　　紹巴

発句の「竹たぐひ無き」は武田首無き、脇の「白うはみえぬ」は四郎（武田四郎勝頼）は見えぬ、第三の「消え果てて」は消え果てて武田氏の滅亡を意味する。いかにも軍記物らしく、実話かどうか疑わしい逸話である。

信長が上洛した永禄一一年（一五六八）九月から二月後、藤孝と光秀は紹巴・昌叱・心前・玄哉といった長慶の連歌にたびたび出座していた連衆に白を交えて、早速連歌を巻いている。白は近衛家出身の聖護院門跡道澄の一字名（連歌名）である。元亀二年（一五七一）二月には有名な『大原野千句』、翌年（元亀三年）九月、紹巴・藤孝・昌叱・心前たちに混じって重然（古田）の名が見える。古田織部の連歌の初出である。次いで天正二年（一五七四）七月、紹巴の発句「真木の板のつぎ橋白し夕月夜」、脇直政、第三藤孝、以下光秀・昌叱ほか重然の連歌に注目したい。紹巴の発句帳に「宇治橋造立ノ時」「宇治橋作リ替侍リシ時之興行」という書き込みがあって、信長政権の許、天正二年五月に信長の家臣塙（ばん）直政が山城守護に任じられ、村井貞勝・明智光秀・細川藤孝の四人が南山城を支配していた。信長の家臣団が宇治橋造営の奉納連歌を催したのである。後、直政は天正四年五月、石山寺（大坂本願寺）の合戦で戦死した。

この頃、注目しておきたい史料がある。島津義久の弟家久の『中書家久公御上京日記』[注11]である。家久は兄の九州支配を祈願して京都から伊勢の神社仏閣を参詣した。帰途、再度、京都に立ち寄り、二度にわたって紹巴たちの連歌会に参加している。それは長篠合戦の直後、『中書家久公御上京日記』の天正三年六月八日条に、

八日、下国に打立候、紹・昌同心にて東寺へ参、大師へ御りやうくの参を拝見申、其より宗久といへる入道の所へ、紹巴より食もたせられ候而たへ候、さて其より紹巴・昌叱へいとまこひ仕、古田左介といへる人、下鳥羽までおくられ候、其道すから恋つか、鳥羽院の跡有、軈て秋の山、さて下鳥羽より舟にて淀川亦きつね川に舟つけて八幡へ参、これまて左介小者つけられ候、其より行ていはら木（茨木）の村藤持寺の観世音の御堂にかり枕……

とある。信長の家臣たちは、合戦の出陣がなければこのように京都の町を楽しんだのであろう。

細川藤孝については、和歌の達人、古典研究者という顔がある。い

わゆる古今伝受の相伝者である。宗祇から三条西実隆に伝わった古今伝受は実隆の孫、実澄から藤孝に伝わった。まず元亀三年（一五七二）一二月に藤孝より実澄に伝受の誓書が出されて伝受が始まり、翌年（元亀四年、七月に改元して天正元年）一月に伝受が続くが、信長と義昭の合戦があって伝受は中断し、八月に再開している。その後も合戦の合間を縫って伝受は行われた。

天正七年（一五七九）一月、藤孝主催の定家卿色紙披露目の連歌会にも触れておきたい。これは藤孝が『百人一首』にもある定家の「来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」の色紙を入手し、紹巴宅で披露の連歌会を開いた。『兼見卿記』[注12]同年一月一六日条に、

長兵求得定家色紙、今日於紹巴所一会張行云々、

とある。小川剛生氏は、藤孝が定家卿色紙を入手したことについて、信長から西岡の地（京都府長岡京市一帯）をあたえられて経済的に豊になったことを挙げるが[注13]、私も賛同である。

この定家卿色紙披露目の連歌は紹巴の発句、藤孝の脇、ほかに連衆は昌叱・心前の四人、四吟連歌である。こうした一流連歌師との少人数連歌は、すでに年譜で示したように、長慶連歌の特徴の一つで、寿慶・宗訊との三吟（天文一九年六月一七日）、宗養との両吟（天文二一年九月二日）、宗養・紹巴との三吟、寿慶追悼）、冬康・宗養との三吟（弘治三年五月三日）、紹巴との両吟（永禄七年一月二二日、宗養追悼）など当時一流の連歌師との少人数の連歌である。何か茶道でいう侘び茶と大寄せの相違を思い出す。

五　豊臣秀吉の和歌・連歌

秀吉と紹巴との交渉は信長・家康よりも親密である。

秀吉と紹巴の連歌の初見は天正六年（一五七八）五月の、秀吉が毛利攻めのための出陣千句「羽柴千句」（「太閤千句」ともいう）である。秀吉は第一の百韻の脇と第十の百韻の発句の二句のみである。各百韻の発句と作者を示すと、

第一の百韻　常磐木もかつ色見する若葉哉　白（聖護院道澄）
第二の百韻　鳴めくる後も初音か子規　禅永
第三の百韻　すくに行く道ある月か夏の空　昌叱
第四の百韻　橘の色香にふかき闇もなし　永種
第五の百韻　水上やちかき雲ゐに飛蛍　文閑
第六の百韻　ふしたては柳もかくす早苗哉　正繁
第七の百韻　明くる夜を水鶏におしむ木陰哉　兼如
第八の百韻　夕立や雲のみな行瀧つ波　心前
第九の百韻　四方にふく風を手にとる扇かな　紹巴
第十の百韻　涼しさを心のままの家居かな　秀吉

で、紹巴や昌叱ら当代の連歌師を集めたところなど、後の秀吉に見られる、いかにも大掛かりな派手好みの気風が見られる。信長の配下にあって、柴田勝家や丹羽長秀といった先輩の武将たちに出陣千句などないのに、疑わしい千句であるが、紹巴や昌叱など世間から注目される行動の連歌師であり、偽作と決めつけかねるが、私はかっての苦い経験から江戸時代の偽作の巧みさにはつい警戒心を持ってしまう。もっ

とも諸本の一つに「太閤千句」とあるのは後世の写本である。

次に秀吉と紹巴・昌叱たちの史料は、天正一三年（一五八五）四月、紀州攻めの後、高野山と交渉の席上、高野山側の代表木食応其の覚え書きに見える。

太閤様御雑談之趣、木食記録之一札

御座敷御人数之事

上様拙僧木食　昌叱聖護院殿　紹巴末座ニ為金剛峰寺使節衆徒両人、次の間ニ諸大名……

とある。秀吉は高野山使節の衆徒や諸大名よりも木食応其や聖護院門跡道澄・昌叱・紹巴を上座に据えている。なぜ昌叱や紹巴といった連歌師がこの席に、しかも高野山使節の衆徒や諸大名よりも秀吉に近い上座にいるのか。連歌師たち芸能者を政治に利用する秀吉特有の行動か。木食応其の出鱈目な覚え書きか。不思議な記録である。

芸能者たちも秀吉に擦り寄った。天正一二年一〇月四日のこと、小牧長久手の合戦の最中であったが、秀吉は京都に帰っていた。この日、造営中の上皇の仙洞御所の工事現場に行くと、紹巴が酒肴を用意していた。吉田兼見の日記『兼見卿記』同日条に、

次於御馬場紹巴献一盞、屏風(金)立之、毛氈已下敷之、筑州(秀吉)着座、公家各対座、菓子有一盞之儀、初献筑州、次徳大寺殿、其外次第不同、無正体、次筑州発句云、

冬なれとのとけき空のけしき哉　秀吉

さかへん花の春をまつ比(ころ)　紹巴

筑州一段褒美、依此儀百石紹巴ニ遣之、即折紙於当座遣之、天下之面目実儀也、次第三幽斎へ所望也、即云、

あたらしき御庭に松を植そへて　玄旨(幽斎)

筑州褒美、機嫌也、

とある。この酒肴がどのように用意されたかはわからないが、芸能者が積極的に秀吉に擦り寄る例といえよう。

芸能者が秀吉との斡旋を買って出ることもあった。天正一四年七月二六日、奈良興福寺の多門院英俊が記した『多門院日記』[注14]に、

寺門指出曲事ノ由秀吉以ノ外腹立トテ驚入、俄ニ且ハ為八朔礼、且ハ為才学宝寿院・常如院上洛了、大事〳〵、沈思々々、

とある。興福寺から秀吉に差し出された領地の報告について、いわゆる差出検地について秀吉の意に添わないことがあり、「以ノ外(もってのほか)腹立」という。その弁明のため興福寺より二人の僧侶が上洛した。七月二八日条に、

京ヨリ宝寿院・常如院下、一段仕合珍重、紹巴是非共可申分由請取了、頓テ又各々召具、一両日中ニ御詫言ニ被上尤之由……

とあって、紹巴が斡旋に乗り出してくれるという。紹巴は興福寺に仕えた松井某の息子なので、斡旋を頼まれたのかも知れない。ただしこの時の斡旋の首尾は不明である。

秀吉と紹巴の同座する連歌は多い。その中、天正一三年八月、北陸に出陣する秀吉は京都郊外の白線辺りで次のような俳諧の連歌を行った。現存する懐紙の存在は知らないが、軍記物の一つ『四国御発向並北陸御動座事』[注15]に、

イナクヒヲカリトル秋ノ最中カナ　紹巴次之

カマヤリモチテ敵ヲミカツキ

最為吉兆者也。

とある。正式の連歌ではなく俳諧連歌である。秋のこととて稲首と見立てた敵を刈り取ろうという秀吉の発句に、紹巴も鎌槍を持って敵を突き破ろうと秋の季語の「三日月」の脇句を付けた。三日月には「箕（み）被（かず）き」を詠み込んでいるか。息の合ったユーモアの応酬である。まさに戦勝を予祝する出陣の吉兆である。

最も豪華な顔ぶれを集めた連歌は、高野山で行われた母親大政所の三回忌の法要時の文禄三年（一五九四）三月四日の「何衣百韻」[注16]であろう。その連衆の顔ぶれと句数を見ると、松（秀吉の連歌名（一字名））八句、興山上人（木食応其）五句、白（聖護院道澄）七句、鳥（今出川晴季）五句、常真（織田信雄）四句、紹巴法眼七句、徳川大納言（家康）四句、玄旨法印（細川幽斎）七句、中山大納言（親綱、公卿）五句、日野新大納言（輝資、公卿）六句、利家朝臣（前田）四句、氏郷朝臣（蒲生）四句、昌叱法橋七句、全宗法印（施薬院）五句、雅枝朝臣（飛鳥井、公卿）六句、由己法眼（大村）六句、右衛門督（高倉永孝、公卿）五句、政宗朝臣（伊達）四句、長俊（山中、執筆）一句である。武士も公卿も錚々たる顔ぶれである。その中で秀吉は最多の八句を詠み、連歌師紹巴と昌叱は七句、聖護院門跡道澄も七句、いかにも秀吉好みの連衆であり、句数までも定められたような連歌である。

こうして秀吉と紹巴の連歌は続いたのであるが、文禄四年（一五九五）七月、秀吉の養子の秀次が切腹を命じられた。秀次事件である。この事件に関連して、切腹させられる者、追放される者が続出した。紹巴もその一人で、知行は没収され、近江の三井寺門前に蟄居を命ぜられた。後、許されて帰洛するのは三年後の慶長二年（一五九七）の頃という。

朝鮮出兵の文禄の役が一応の停戦を結び、慶長元年（文禄五年、一五九六）九月に明国の使節を迎えたが、和議の条件が違い、講和は決裂、秀吉は再度朝鮮出兵を命じた。その十一月、秀吉は夢で住吉明神の歌を感得した。幽斎は秀吉からこの夢想の歌を聞いた。細川家の家記「綿考輯録（めんこうしゅうろく）」[注17]には次のようにある。

慶長元年丙　申文禄五年十一月廿七日改元（略）

十一月、大閤御夢に和歌を得給ふ、幽斎君是を御祝し被成候、御歌序文ともに、慶長のはしめの年、仲のふゆ、大坂の亭にうつりおはしましゝ比、奇瑞の異夢を感せらるゝ事あり、其和歌にいはく、

世をしれとひきそあはする初春のまつの緑も住よしの神

凡霊夢あり、喜夢あり、むかし黄帝夢に華胥氏の国にあそふ、さめての後天下大に治れる事、彼境のことしといへり、又殷高宗の良佐を得て、国家盛なりし事、めてたき夢のためし也、中につきて松ハ十八公の名あり、これ又丁固の夢に感せし嘉兆にあらすや、抑住吉の御神ハ、西の海の遠き塩ちよりあらはれ出て、ちかきさかひに迹を垂給へり、たゝこの我朝を鎮護したまふのミにあらす、はるかに異国征伐の御ちかひ専なるかゆへに、神功皇后の三韓を平け給ひし時も、此御神ことに威猛を施したまへりとそ、されハこの秋津洲、四の海、波の声せすして、こまもろこしもなひきしたかひたてまつる事、たゝ此時にあり、其久しき行さきを思ふに、住吉の松に、こ松のかけをならへつゝ、一木々々に、千よをかそへても、勁節枝さかへ、貞姿色みさほにして、猶かきりなき御齢なるへし、いまこの事をきくそ、をろかなる心にもよろこひにた

へす、いさゝか筆をそめて祝詞をたてまつるといふ事しか也、

法印玄旨上

住よしの神の恵もあらはれて
君か八千よを松のことのは

翌月、秀吉は感得した夢想歌を発句と脇にして百韻を詠み、再度の朝鮮出兵に備えたのである。

この連歌の連衆の顔触れを確かめておきたい。秀吉好みの官位の高い豪華な顔触れである。名前の下の（　）に年齢を示す。

太閤（一〇句）豊臣秀吉（61歳）

准后（八句）聖護院道澄（53歳）、一字名「白」。秀吉の連歌ではすでにお馴染みの連衆である。慶長一三年没。

昌叱（八句）連歌師（57歳）。慶長八年（一六〇三）没。里村南家の祖。

日野大納言（八句）輝資（42歳）。弘治元年（一五五五）生、父は広橋国光。永禄二年日野家相続、天正一五年正二位権大納言、慶長八年辞官、元和九年（一六二三）没。

烏丸大納言（八句）光宣（48歳）。光康の息。従一位准大臣、慶長一六年没。

広橋中納言（七句）兼勝（39歳）。国光の息。元和四年従一位内大臣、元和八年没。

右宰相（七句）高倉永孝（37歳）。永相の息。正三位中納言、慶長一二年没。

雅枝（七句）飛鳥井（28歳）、後に雅継、雅庸。従三位権大納言、元和元年（一六一五）没。

右衛門佐（六句）西洞院時慶（45歳）、天文二一年（一五五二）生。時当の息。『時慶卿記』記主。寛永一六年没。

徳善院（八句）前田玄以（58歳）、天文八年（一五三九）美濃出身。信長に仕え、秀吉の許では京都の行政、慶長元年朝廷より徳善院の称号を受ける。関ヶ原合戦では戦闘に参加せず、家康より本領安堵。慶長七年没。

景敏（六句）後の昌琢（23歳）天正二年（一五七四）生。父は昌叱、母は紹巴の娘。一二歳で執筆を勤め、天正一九年（一五九一）より景敏を名乗り、慶長四年（一五九九）で剃髪し昌琢、寛永五年（一六二八）柳営連歌に出座。寛永一三年没。

重然（六句）古田織部（52歳）。これもお馴染みの連衆である。

前左大臣（八句）近衛信輔（32歳）、永禄八年（一五六五）生、父近衛前久。天正五年（一五七七）信長の加冠で元服、信基、後に信輔・信尹。文禄の朝鮮出兵に従軍を試みるが後陽成天皇の勅勘を受け、薩摩国坊津に配流、秀吉の奏請で慶長元年（一五九六）九月帰京。後、従一位関白、慶長一九年（一六一四）没。『公卿補任』によるとこの年（慶長元年）前左大臣は九条兼孝（44歳）、一条内基（49歳）、二条昭実（41歳）、近衛信輔（32歳、在国）の四人であるが、信輔は連歌興行時には帰京していた。早稲田大学伊地知文庫20―39の句上に「近衛関白殿　前左大臣」とある。

友益（一句）秀吉の側近（右筆）か、執筆を勤めたか。

秀吉はこの翌年、慶長三年（一五九八）八月、伏見城で六二歳の生涯を閉じた。

六　徳川家康の和歌・連歌

慶長八年（一六〇三）徳川家康が征夷大将軍に就任して開かれた江戸幕府は、慶応三年（一八六七）の大政奉還までおよそ二六〇年続いた。その間、毎年一月一一日、幕府の恒例行事として江戸城内において柳営連歌が続けられた。

徳川氏は連歌に関わりの深い家柄であり、連歌にまつわる伝承がつきまとった。[注108] 家康の先祖、三河国松平（愛知県豊田市）の豪族松平氏が連歌を催した時、垣間見ていた旅人がいた。松平氏の当主はその旅人に連歌の記録係である執筆（しゅひつ）を依頼した。その縁で旅人は松平家の入り婿となり、以後、松平氏の一族は三河国内に広がり、その一つ岡崎の松平広忠の息子が家康である。家康の生母が懐妊した頃、広忠は「神々の長きうき世を守るかな」という句を夢に見た。夢想句の感得である。広忠は時宗寺院大浜（愛知県碧南市）称名寺の其阿上人に話して連歌を巻いた。その伝承が家康より家宣までの歴代徳川将軍と夫人たちの歌集『富士の煙』[注109]（内閣文庫）に載る。同じ伝承を大浜称名寺蔵『東照山松樹院称名寺開山ヨリ歴代年譜』[注20]から引用する。

一当寺十五代其阿上人一天大和尚　天文廿二年二月十七日卒

連歌之達人ニ而広忠公御召ニ付岡崎御城江月毎ニ登城にて、折々広忠公天満宮江御参詣ニテ御連歌有て格別帰依僧也。天文十二（ママ）年二月廿六日夜広忠公天満宮ヨリ御連歌御発句御感得ニ付其阿上人一天大和尚江御相談有て御夢想開之御連歌天満宮於神影前御興行有之、同年十二月廿六日夜東照宮御誕生被為遊、依之若君江御幼名奉差上候様蒙仰候ニ付御連歌之御脇句に依竹千代君と奉献上候処、御満悦有て御文台・御硯箱・御懐紙・御硯・御水入・銀子・巻物等を拝領。于今所持大切宝物トス。仝正月十一日御城御連歌根元此御吉例より始ルル当代也。

連歌懐紙も第七句まで称名寺に伝来する。

天文十二年二月廿六日
於称名寺披
夢　想　之　連　歌
神〳〵のなかきうき世を守るかな　広忠
めくりはひろき園のちよ竹　其阿
玉をしく砌の月は長閑にて　政家
かすみのひまにはふく友鶴　弘光
雪はまた残るうらわの明離れ　易屋
作る田中の道あらはなり　相阿
五月雨に晴ましらるゝ里つたひ

家康の父広忠が感得した発句によって連歌が行われ、その脇句より家康の幼名竹千代と名付けられたという。この伝承は、誕生年の天文十一年（一五四二）とは相違はあるが、家康の幼名に関わる連歌である。

現存する家康の連歌の懐紙は二例で、一つは前節で見た文禄三年（一五九四）三月、秀吉の母大政所追悼の連歌、二つは慶長四年（一五九九）二月二五日の「夢想連歌」（京都大学文学部図書館）だけである。

家康の側近として仕えた板坂卜斎の覚書『慶長年中記』に、

家康公書籍を好せられ、南禅寺三長老・東福寺哲長老・外記局郎・

水無瀬中納言・妙寿院・学校・兌長老など常々被成御咄候故、学問御好、殊之外文字御鍛錬と心得、不案内にて詩歌の会の儀式有と承り候、根本詩作歌連歌は御嫌ひにて、論語・中庸・史記・漢書・六韜・三略・貞観政要、和文延喜式・東鑑他、其外色々大明にては高祖寛仁大度を御褒、唐の太宗・魏徴を御褒、張良・韓信・太公望・文王・武王・周公、日本にては頼朝を常々御咄被成候、

とある。前に家康の誕生の伝承で引用した後世の文化一四年の『富士の煙』にも、

微臣曩に古文故事を編集して、竊に神君の御文徳を賛颺す。中に就て神君若干首を得たり。其御詩作の如きはいまだ前聞せざる処なり。按ずるに慶長年中記に神君詩作連歌も御嫌ひにて、論語・中庸・史記・漢書・六韜・三略・貞観政要・和文延喜式・東鑑他といへり。然れば神君の好ませ給ふ処は、治国平天下の書にして、詩歌の如きはさらに神意に応じ給ふ処にあらじ。

とある。家康の好むところは、詩歌のような軟弱な文芸でなく、論語や中庸といった哲学書・東鑑などの歴史書といった強硬な学問書である。実利的な書物といえよう。

珍しいのは家康の関係で夢想連歌[注20]がある。

慶長四年二月廿五日

夢想連歌

朝日かなさかゆる松のほこりけり　　ねゝ女
四方の霞をはらふ松風　　内大臣 家康
春の海残らす波も治りて　　中納言 秀忠
釣にくらせる船そ長閑き

急雨や芦のそよきと成ぬらん　　忠吉
月にあまたの雁渡るなり　　康元
いねかたき夜長さも猶草枕　　秀康
秋のあらしを野へのかたしき　　定勝
山かくる里より霜も降初て　　万千世
下葉落そふ陰のむら竹　　お亀女
暮ぬれは蚌の光爰かしこ　　宮増
池水ちかきはしゐ涼しも　　おねゝ
萍は波の行ゑにかたよりて　　宮千世
つなく間あらす渡りするふね　　長福丸
袖は只たえぬ市路の帰るさに　　松千世
笠かたふくる雨のをちこち　　国千世
問よらんやとりは見えす野は暮て　　はあ女
ほのか也ける峯の月代　　おさい女
霧やまた山かたつきて残るらん　　祖景
吹たゆみたる秋の川風　　正直
散花をせゝのしからみかけ留て　　右政
春も立行かけの藤波　　家清
二　時鳥弥生の末の一声に　　康隆
暮ゝも分ぬ旅のやすらひ　　康景
余波猶酒の盃汲かさね　　玄与
祭の場を帰る衣手　　周安
さすも只小舟の棹の隙をなみ　　忠賢
よとみもあえぬ波の早川　　三益

降雨は見るかうちより晴とをり　伊長

名残折裏七句目・八句目（挙句前・挙句）

おもふとは千世も経ぬへき宿にして　祖景

植そへにたる門の呉竹　家清

発句は脇を詠む「ねゝ女」が夢中に感得した夢想発句「朝日かなさかゆる松のほこりけり」である。この連歌の特徴は「ねゝ女」以下、初折裏一〇句目の「おさい女」（全体で発句から数えて一八句目）までは家康の一族、息子や息女または側室であろう。一族の男女がこぞって詠む連歌は珍しい。

初折裏一一句目の「祖景」から二折表七句目「伊長」までは家康の側近かで、ここで連衆全員の一巡が終わる。この連歌は何処で行われたのであろうか。伏見の家康の屋敷あたりが想像できるが、果たしてこのような連歌が行われたのであろうか。ここでも私は偽書ではないかと疑ってしまう。しかし疑いながら、以下、連衆の比定を試みた。主な参考文献は『寛政重修諸家譜』・中村孝也『家康の臣僚武将篇』・同『家康の族葉』[注29]・煎本増夫『徳川家康家臣団の事典』[注30]などである。

ねゝ女　脇「四方の霞をはらふ松風」夢想発句感得の女性。この人物が判ればこの連歌の性格や目的が判るが全く不明。改めて後述したい。

家康[内大臣]　第三「春の海残らす波も治りて」五八歳、正二位内大臣。（後、征夷大将軍、東照大権現）。

秀忠[中納言]　初表四「釣にくらせる船そ長閑き」二一歳、従三位前中納言。家康三男、（後、二代将軍）。

忠吉　初表五「急雨や芦のそよきと成ぬらん」松平忠吉二〇歳。（関ヶ原合戦後、尾張清洲城主、慶長一二年没）。

康元　初表六「月にあまたの雁渡るなり」四八歳、下総関宿城主。久松松平、母於大方（伝通院）、家康異父弟。

秀康　初表七「いねかたき夜長さも猶草枕」二六歳、従四位下参議、下総結城城主。家康次男（後、越前北庄城主）。

定勝　初表八「秋のあらしを野へのかたしき」四〇歳、下総小南城主。久松松平、母於大方（伝通院、家康異父弟、後、伊勢桑名城主）。

万千世　初裏一「山かくる里より霜も降初て」一七歳、松平信吉の幼名、下総佐倉城主。家康五男、（はじめ甲斐武田氏を継ぎ、後、水戸城主、慶長八年没）

お亀女　初裏二「下葉落そふ陰のむら竹」四〇歳、家康長女、母築山殿（家康最初の正室、信長の命により殺害）、天正四年新城の奥平信昌と結婚、関ヶ原合戦後、信昌は美濃加能城主となる。

宮増　初裏三「暮ぬれは虾の光爰かしこ」

おねゝ　初裏四「池水ちかきはしゐ涼しも」

宮千世　初裏五「萍は波の行ゑにかたよりて」

長福丸　初裏六「つなく間あらす渡りするふね」

松千世　初裏八「袖は只たえぬ市路の帰るさに」八歳、家康六男、後の松平忠輝。初名辰千代。兄松千世が長沢松平を継ぐが夭折、弟が長沢松平の養子となり松千世を名乗る。（後、越後高田城主。大坂夏の陣に遅参、家康の不興を買い配流、天和三年没、九二歳）

国千世　初裏八「笠かたふくる雨のをちこち」

はあ女　初裏九「問よらんやとりは見えす野は暮て」

おさい女　初裏一〇「ほのか也ける峯の月代」
祖景　初裏一一「霧やまた山かたつきて残るらん」
正直　初裏一二「吹たゆみたる秋の川風」保科正直（ほしなまさなお）か、五八歳。天正一二年家康の異父妹（久松俊勝女）と結婚。慶長六年没。
右政　初裏一三「散花をせゝのしからみかけ留て」
家清　初裏一四「春も立行かけの藤波」竹谷松平か、三四歳、小田原攻めの後、武蔵八幡山一万石城主。
康隆　二表一「時鳥弥生の末の一声に」
康景（やすかげ）　二表二「暮ゝも分ぬ旅のやすらひ」天野康景か、六三歳、幼少より小姓として仕え、家康の人質時代、尾張・駿河に従った。三河三奉行の一人。『寛政重修諸家譜』に、
天正三年正月康景が下女夢に連歌の句を覚ゆ。さめて忘れず。これを康景に告。康景其句吉兆なりとおもひたゞちに言上するのところ、二十日御鎧の賀儀あるにより、この道の宗匠をめし、夢想の句を発句として連歌の会あり。この年長篠の御合戦勝利ありて武田家の勢ひやゝおとろへ、終に患を除かれしかば、毎年嘉例としてこれを行はる。
とある。家康の周辺の伝承として、また柳営連歌にも関わる伝承として注目。
玄与　二表三「余波猶酒の盃汲かさね」
周安　二表四「祭の場を帰る衣手」
忠賢　二表五「さすも只小舟の棹の隙をなみ」
三益　二表六「よとみもあえぬ波の早川」
伊長（これなが）　二表七「降雨は見るからちより晴とをり」松下伊長か、関ヶ原合戦の前、伏見城で討ち死、五三歳。

偽書かと疑いつつ、この夢想連歌の背景を考えてみたい。
①前年、慶長三年八月一八日秀吉没、六二歳。
②当日、慶長四年二月は関ヶ原合戦の一年半前。
③〃二月廿五日は連歌の祭神天満天神の祭日。
④この後、閏三月三日五大老の内、前田利家病没、六二歳。
⑤これを契機に加藤清正や黒田長政ら秀吉子飼いの武将らによる石田三成襲撃の計画があり、三成は家康の許に逃避し、
⑥結城秀康が三成を護衛して近江国佐和山城に護送。三成は翌年七月まで佐和山城に居住か。

こうした緊張の時期、家康の館に男女ともに一族集結、嫡子（三男）秀忠・忠吉・異父弟松平康元・次男結城秀康・異父弟松平定勝・五男万千世らが集結した。
脇を詠む「ねゝ女」は誰か。この当時、①「おね」「ねね」と呼ばれた秀吉正室、北の政所（高台院）や②中村孝也氏の『家康の族葉』（三九五頁）には「ねね」と呼ばれたとある秀吉の側室淀殿、また『連歌総目録』には③慶長四年（一五九九）二月二五日、④元和九年（一六二三）九月＊日（不記）、⑤寛永元年（一六二四）九月一七日の連歌の連衆に「ねね女」「おねね」がいるが、この連歌とは縁遠い人物と思われる。
連歌懐紙はその時の人物名が記されていて、後世の記録や伝承と違って史料的価値が高い。それ故にいっそう「偽文書」に注意を払わなければならない。
本稿は中世から近世への移行期の武士たち、天下人を目指した武将

たちということで、長慶・信長・秀吉・家康の和歌・連歌を紹介し、史料として天下人の行動を追求した。最後に天下人ではないが上杉景勝の家臣たちの百首歌と前田利家の家臣たちの万句連歌を見ておきたい。

慶長七年二月、上杉景勝の家臣直江兼続ら武将や越後以来の僧侶たちが上杉氏の新領地米沢の北部、亀岡文殊堂に百首和歌を奉納した。[注29] 百首といっても、和歌は六七首で、漢詩は三三篇である。景勝が秀吉の命によって越後春日山城（新潟県上越市）から会津若松（福島県）に国替えになったのは慶長三年（一五九八）のことである。それより僅か三年後、関ヶ原合戦で敗者石田三成に味方したため、さらに徳川家康の命により慶長六年には出羽国米沢に国替えになった。会津では一二〇万石の領地が米沢では四分の一の三〇万石に削封された。

同年一一月、上杉藩は米沢移転を敢行した。こうした国替えの直後に行われた兼続たちの続歌百首の文殊堂奉納は二つの目的があった。一つには新領地の神仏への挨拶。奉納された亀岡文殊堂は平安時代初期、大同二年（八〇七）徳一上人によって創建された古刹である。古来、芸能や文芸には宗教的な意味が大きい。戦国期末から江戸時代初期の間に大聖寺と改められたという。二つにはこうした寄合の文芸による上杉藩の家臣たちの団結心・結合心への効用である。

慶長一一年（一六〇六）一〇月から慶長一二年一一月にかけて加賀国金沢藩家臣らが加賀白山社に万句連歌を奉納した。現存の白山比咩（しらやまひめ）神社所蔵の『白山万句』[注29]である。連歌懐紙は、一、慶長一〇年九月の宗甫・明宗両吟千句、二、慶長一一年七月の宗甫独吟百韻、三、慶長一一年一〇月から一二年一一月の万句連歌である。万句は百韻が一〇〇巻であるが、実際には八四巻と断簡が三巻残るだけで、一五巻ほど不足している。現存の各巻には奉納者の名が記されているが、それらには藩主前田氏一族の名は見当たらない。何らかの事情で、例えば藩主前田氏一族の奉納懐紙は別に保存されたか、白山社から城内に移されたか、江戸屋敷に移したか、そのためかえって紛失したか。今後、不足の一五巻ほどは発見されるかも知れない。

万句連歌の発端は、慶長一〇年九月の宗甫・明宗両吟千句を詠んだ北村宗甫が或る夜の夢に「末の人かけ勧進してこそ」という句を感得した。翌日、京都在住の藩主の東の御方（利家夫人まつ、後、芳春院）より白山社修築造営を命ずる使いが下った。造営の使いが下った前夜に見た夢想句なので皆「奇（あや）しき夢想」といった。造営は慶長元年（一五九六）に完成した。その後一〇年、夢想句はそのままになっていたが、また夢の諭しがあって、宗甫は鷹栖明宗を誘って、夢想句「末の人かけ勧進してこそ」を脇起（わきおこ）し（七・七の短句を最初（発句）にして詠む）に千句を詠んだ。これが機会となって『白山万句』が行われた。

『白山万句』興行の時期は、関ヶ原合戦と大坂の陣の中間期に当たる。大坂には堅固な城と豊かな蓄財の豊臣氏もいて、江戸幕府も完全に安定とはいえない。前田氏の金沢藩も不安定な時期であって、関ヶ原による国替え後の上杉氏の米沢藩のように藩の団結・結合を必要とした。天下人とは直接的に関係はないが、家康と同時代の武士の文芸活動として、続歌の『亀岡文殊堂奉納詩歌百首』と連歌の『白山万句』を掲げた。

七　まとめに代えて――天下人に見る歴史と文学の間――

シンポジウムで話した史料より二・三増えてしまったが、予定していた天下人たちの和歌・連歌の史料は以上の通りである。文芸作品、特に寄合の文芸、想像の文芸に対する天下人たちの態度をお判りいただければ幸である。

普通、天下人としては信長・秀吉・家康が挙げられるが、本稿では長慶を加えた。長慶は信長たちの先鞭をなした人物である。長慶を加えたのは、他の三人に較べて、「古沼の浅き方より……」で見られるように機知がある。前句に付いて、前句を説明し、しかも情景がありと判るようなイメージを与えてくれる。寄合の文芸、連歌の名句の一つであろう。しかし、それぞれの句については、良い悪い、上手下手はそれぞれの鑑賞者に任さなければならない。私は『瀧山千句』と『飯盛千句』の各発句の相違、詠み込まれた地名、摂津から五畿内への拡張に強く長慶への興味を持つ。奉納連歌、法楽連歌ではないが、古来から日本の文芸には祈り、神仏への加護の期待が込められる。長慶は天下人への希望を連歌に託したと考えてみた。

もう一つ、長慶の連歌で強調したいのは、宗養や紹巴・昌叱・心前ら専門の連歌師との両吟・三吟など少数の連衆との連歌である。選んだ連衆と連歌を詠む楽しみである。

これに対し、秀吉は豪華な顔ぶれ、高位高官を集める。母大政所の三回忌の法要連歌や慶長の役の朝鮮出兵前の夢想連歌などである。長慶・秀吉に較べ、信長は和歌・連歌に対してははなはだ冷淡である。むしろ信長に従って上洛した藤孝（幽斎）・光秀・織部の連歌に注目した。他に黒田長政の連歌についても述べなければならないが、別稿に譲りたい。

家康も和歌・連歌には興味を示さない武将であった。歴史書や軍記を愛読したという。むしろ慶長四年二月の夢想連歌について真偽の程を明らかにしたい。本物とすれば貴重な史料である。また偽書としても何故このような連歌が作られたのであろうか。興味深い連歌懐紙である。

注

① 廣木一人・松本麻子・山本啓介編『文芸会席作法書集　和歌・連歌・俳諧』風間書房　'08。

② 島津忠夫校注『連歌集』新潮社　'79。

③ 奥田勲ほか校注・訳『連歌論集　能楽論集　俳論集』小学館　'10。

④ 今谷明・天野忠幸監修『三好長慶』宮帯出版　'13、天野忠幸『増補　版戦国期三好政権の研究』清文堂　'15ほか。

⑤ 『三好別記』群書類従　合戦　群書類従二一　'59。

⑥ 鶴崎裕雄「飯盛千句解題」『千句連歌集　八』古典文庫　'88、鶴崎裕雄「三好長慶の連歌」今谷・天野監修『三好長慶』宮帯出版（前掲）、鶴崎裕雄「三好長慶と寄合の文芸」仁木宏ほか編『飯盛山城と三好長慶』戎光祥出版　'15。

⑦ 沢井耐三ほか校注「猿の草紙」新日本古典文学大系54『室町物語集　上』岩波書店　'89。

⑧ 鶴崎裕雄　新出連歌資料「（仮題）天文三好千句三つ物」国文学83・84合併号　関西大学国文学会　'02・1。

⑨ 鶴崎裕雄「『瀧山千句』と三好長慶」中世文学34　'89・5。

⑩ 鶴崎裕雄「飯盛千句解題」『千句連歌集　八』古典文庫（前掲）。

⑪ 村井祐樹「家久公上京日記」東大史料編纂所研究紀要16　'06・3。河内将芳『戦国時代の京都を歩く』吉川弘文館　'14は「家久公上京日記」を手にして「洛中洛外回屏凡」の中を彷徨するような楽しい案内書である。

⑫ 史料纂集『兼見卿記』第二　続群書類従完成会。

⑬ 小川剛生「細川幽斎―人と時代―」森正人・鈴木元編集『細川幽斎 戦塵の中の学芸』笠間書院　'10。

⑭ 『多門院日記』四　角川書店。

⑮ 『四国御発向並北陸御動座事』続群書類従21下　続群書類従完成会。

⑯ 『和歌山県史』中世　和歌山県史編さん委員会　'94。

⑰ 土田将雄・今谷明・石田晴男編『綿考輯録』出水神社　'88。

⑱ 鶴崎裕雄「三河の国人連歌から天下の柳営連歌へ」地方史研究381　'16・6。

⑲ 鶴崎裕雄「夢想和歌・連歌―学際的研究を目指して―」国文学101　関西大学国文学会　'17・3。

⑳ 鶴崎裕雄「連歌師宗牧と三人の時衆僧」『戦国の権力と寄合の文芸』和泉書院　'88。

㉑ 中村孝也『家康の臣僚 武将篇』人物往来社　'68、『家康の族葉』国書刊行会　'88。

㉒ 煎本増夫『徳川家康家臣団の事典』東京堂　'15。

㉓ 鶴崎裕雄「直江兼続・大国実頼兄弟と寄合の文芸―『亀岡文殊堂奉納詩歌百首』の歴史的意味―」花ヶ前盛明監修『直江兼続の新研究』宮帯出版　'09。

㉔ 棚町知彌・鶴崎裕雄・木越隆三編集『白山万句―資料と研究―』白山比咩神社　'85、鶴崎裕雄「中世・近世の地域支配と和歌・連歌の奉納―白山比咩神社奉納『白山万句』を中心に―」地方史研究協議会編『伝統の基礎―加賀・能登・金沢の地域史―』雄山閣　'14。